

6月議会での答弁、ようやく少し前向きな答弁となりました。
市民病院への貯水槽設置は、優先順位1位…ですよねえ～！
災害時の「水」の備蓄の重要性は、かねて提言し続けてきましたが、
東日本大震災で、さすがに市長も再認識せざるを得なくなったと思います。

市民病院では、今、井戸水で日量200tをまかなっていますが、
地震時には、その井戸がどうなるかわかりません。
受水槽や高架水槽で150tを貯めることができるといいますが、
それだけでは1日分にも足りないこともハッキリしました。
節約しても日に80t必要というのですが、発災時にそんなことが通用する？
仮に、そうだとしても、現状では2日分しかないわけで、
改めて、飲料水兼用耐震性貯水槽の設置を求めました。

65年前の三河地震の時には、
「井戸から黒い温かい湯が地上60cmまで、2週間以上流れ出し、毎日起きる
余震のつど湧き出す量が多くなった。余震がなくなった時は水位が低下したが
これが1か月以上続いた」とあります(愛知県防災部資料)。

一昨年、のりこは、能登半島地震の後を視察したのですが、
輪島市民病院では、受水槽に汚水が入ってしまい1日145tをまかなうために
給水車80台が毎日給水し続けたという話でした。
いずれ、水道幹路を復旧させなければなりません、
最低でも、自前で3日4日保てなければ、住民の命はどうなるのか！！です。

今年度から来年度にかけて、合併後の「地震防災計画」が策定されますが、
今度の震災をどれだけ教訓にしたか…市民の注視が欠かせません。
みーんなでモノを言わないと、変わりませんよ～！！

今、市の防災訓練は、学区持ち回りのイベント形式で行われています。中学校区単位で、関係住民も多数出席は良いのですが、どうしても毎度おなじみの「住民はお客さん」のパターンです。

そこで、住民が主体の「災害発生を想定し、地域をみてまわる」形を提案しました。実際に、住民自身が
「火災を発見して、消火器やバケツを探して消火する…」
「地震で通れなくなった道路(想定)を迂回して、避難所に向かう」
「近所の動けないお年寄りや車イスの人を連れて避難する…」
「避難所では、町内の誰が無事か情報交換をして、安否確認名簿をつくる…」
「町内のどこに、誰がいるのか、助けはいるのか…どんな助けがいるのか知る…」
「被災によって、地域がどうなったのか…」
…「被災マップ」だけでなく「救援マップ」をつくる」などなど、さまざまな手法があります。

ついでに、耐震診断をしてもらったり(業者を呼んでもいいし)、炊き出しをみんなでやって(家にあるものを持ち寄って)町内交流をすれば次に、どんな訓練をするか…という話にもつながりましょう。住民の中には、建築士さんや医療関係者、ヘルパーさん、いろんな人がいるでしょうから、そうした人に知恵や知識を披露してもらえば、さらに有効でしょう。話のついでに、災害時の役割分担なども良い方向に向くかもしれません。夜間訓練だって、子ども連れで試みれば、昼間とは全然違うはず。

一部の自主防災会では、すでにやっているようですが、これを、市でも行うよう提言しました。「要援護者支援名簿づくり」や登録、「個別支援計画づくり」も一挙に進むのではないのでしょうか。いえいえ、進ませなければなりません。

いまほど、みんなが関心を持っている時はないはず。今やらないで、何時やるんじゃ！！